

令和4年度 岩手県立大学

「文理融合データサイエンス教育プログラム」自己点検・評価報告書

岩手県立大学高等教育推進センター 高等教育企画部

令和4年度より、岩手県立大学では「文理融合データサイエンス教育プログラム」を実施した。この教育プログラムの自己点検・評価結果は次のとおりである。

1. プログラムの履修・修得状況

本プログラムを構成する各科目では、学内の学務システム (Active Academy Advance) によって履修・修得状況を、授業支援システム (WebClass) によって受講者毎の課題提出状況を、それぞれ把握することができる。令和4年度の実績は次のとおりである。

本プログラムを構成する「情報リテラシー」と「大学で学ぶ・大学を学ぶ」は全学部の新入生全員が履修しており、新入生460人の履修割合は100%であり、両科目を修得し、本プログラムを修了した学生数は454人（新入生全体の98.7%）であった。

2. 学修成果

「情報リテラシー」では、授業アンケートにおける「あなたはこの授業の到達目標を達成できましたか (6段階評価)」との設問について、89.1% (293) が4以上の回答であった。自由記述には「これから課題をこなすためのアプリの使い方やデータの比較方法を学べた」などの記述が散見され、学修成果を今後活かす姿勢が窺えた。

また、「大学で学ぶ・大学を学ぶ」では、授業アンケートの「あなたはこの授業の到達目標を達成できましたか」で81.5%が肯定的な回答をしている。令和5年度以降は授業アンケートを実質的に記名化することで、成績と達成度の自己評価の関連をさらに深く分析し、改善に活かす。

3. 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

「情報リテラシー」では、授業アンケートにおける「この授業で得たものは多かったと思いますか (6段階評価)」との設問について、94.5% (311) が4以上の回答、「授業の難易度はあなたにとってどうでしたか (5段階評価)」との設問については4.9% (16) が5 (難しい) と回答していた。TAによる目配り、難易度別課題の見直しにより、理解度の向上を図っていく。

また、「大学で学ぶ・大学を学ぶ」では、内容の理解度に関わる項目をセマンティックディファレンシャル法の5段階で尋ね、「授業内容の量はあなたにとってどうでしたか」には71.9%の学生が、「授業を進める速度はあなたにとってどうでしたか」には82.2%が、「授業の難易度はあなたにとってどうでしたか」には72.6%の学生が3 (ちょうどよい意味) を選択した。令和5年度以降は成績と理解度の関連をさらに深く分析し、改善に活かす。

4. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

「情報リテラシー」の授業アンケートでは、「総合的に考えてこの授業に満足できましたか (6段階評価)」との設問について、93% (206) が4以上の回答であったことから、満足度の高い1年次必修科目として、推奨度の高い授業といえる。

また、「大学で学ぶ・大学を学ぶ」の授業アンケートでは、「この授業で得たものは多かったと思いますか」には 80.9%が、「総合的に考えてこの授業に満足できましたか」には 78.6%が肯定的な回答を示した。令和5年度以降は、成績と満足度等の関連をさらに深く分析するとともに、本プログラムを修了した学生から後輩への推奨度をはかりながら改善に活かしていく。

5. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラムを構成する「情報リテラシー」と「大学で学ぶ・大学を学ぶ」は、令和4年度から全学部共通の基盤教育科目の必修科目（2科目ともに1年前期開講）であり、全学部の1年生全員が履修している。令和5年度以降も同様に全学部の1年生全員が履修する。

6. 学外からの視点

・教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本学の卒業生の就職先は、医療、福祉、情報通信業、公務、製造業、サービス業、金融・保険業など、多業種にわたっており、卒業生には、AIをはじめとする最新技術を活用し、新たな価値やあらたな社会を創造することが求められている。本プログラムの修了生が卒業する令和8年度以降からは、企業等へのアンケートなどをもとに本プログラムの改善に努める予定である。

・産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

岩手県内の高等教育機関や地方公共団体、経済・産業団体からなる「いわて高等教育地域連携プラットフォーム」による、「高等教育人材の教育及び県内定着促進に関するアンケート調査」によれば、岩手県内の430事業所のうち、約7割の事業所大学等高等教育機関に求める教育プログラムとして「数理・データサイエンス・AI・IT教育」をあげている。また、本学の設立団体である岩手県が示した「いわて県民計画（2019～2028）」では、AIをはじめとする第4次産業革命技術を活用し、新たな社会を創造し、岩手県の未来をけん引する人材の育成を目指している。このような社会的な要請に応えるべく、本プログラムの改善に努めていく。

7. 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

「大学で学ぶ・大学を学ぶ」の授業アンケートでは、「この授業にはもともと強い関心がありましたか」に48.7%の学生のみが肯定的な回答を示していた。これに対し、否定的な回答をしていた学生のうち「この授業で得たものは多かったと思いますか」では64.9%が、「総合的に考えてこの授業に満足できましたか」では60.8%が肯定的な回答を示しており、授業を履修したあとで楽しさや意義は理解されたといえる（なお、当初肯定的な回答をしていた学生のうち97%の学生は満足度等に肯定的な回答をしている）。

8. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

「情報リテラシー」についての授業内容（データサイエンスや情報機器の操作法など）について、学生が相談できる全学的な窓口を令和5年度から設けることとしている。

また、「大学を学ぶ・大学を学ぶ」では大学の歴史やカリキュラム全般も学ぶ授業内容となっており、令和5年度以降は内容別にわかりやすさを評価できる成績評価を導入する。

以上